
緋弾のARIA～呪われた眼を持つ者～

クロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜呪われた眼を持つ者〜

【Nコード】

N1976Z

【作者名】

クロス

【あらすじ】

呪われた眼 複写眼をもつ主人公、海山玄武はキンジと共に武偵、神崎・H・アリアに出会ってしまい、色々と面倒ごとに突っ込むようになったしまった。

週に3話あげれたらいいほうです。

今日の天気は晴れ時々少女(前書き)

初投稿のクロスです。初めて何でもちゃくちゃだと思いますが気長
い眼で見てくださいm () m

主人公紹介

名前..海山玄武一カイザンゲンブー

学科..探偵科 Sランク

武器..トカレフTT-33 3丁どれも改造銃

刀 3本(月光、朱雀、カゲロウ陽炎)

太刀 1本 ムゲン霧幻

ナイフ 2本

ワイヤーつき投げナイフ 10本

身長..172? 体重..55?

アルファ・ステイグマ

能力..複写眼.....この眼の保持者は超能力の発動を一度見ると能力の構造を読み取り、自分のもの
にできる。(相手の発動してる能力を消すこともできる)

- ・限られた時間でしか使えない(現在は5分)
- ・時間ギリギリまで使うと、次の日全身が筋肉痛

で動けなくなる

・精神的に重いダメージを負うと眼が暴走し、回
まわりを破壊し尽くす

→呪われていると言われる理由

容姿

黒髪にカカシ先生みたいな普段は黒い眼

今日の天気は晴れ時々少女

第一弾 今日の天気は晴れ時々少女

空から女の子が降ってくると思うか？

多分、嬉しいなあとか言うやつがいるかもしれんが実際に全く嬉しくない。

少なくともそれを体験した遠山キンジと俺こと海山玄武カイザンゲンブはそうは思わないだろう。それをきっかけに人生は激変したのだから・・・

ピン、ポーン

慎ましいドアチャイムの音で俺たちは目が覚める。
どうやらキンジはベッドでトランクス一丁寝ていて俺はソファァーで制服で寝ていたらしい

（つーか誰だよ七時なんて朝っぱらから）

「キンジ、まだ寝るから出てくれ」

キンジが服を着てる途中に言った

「寝るなそしてゲンお前が出る」ゲンってのは俺の呼び名だ

「嫌だ！俺のエネルギー源は睡眠時間だ！よって俺は寝る」

キンジがため息をついて玄関に行った。なんだ行くんじゃない
「絶対起こさないで放置しといてやる」

「ひどっ」

そして俺は眠りについた。

俺はそのとき二度寝したことを一生後悔するであろうそのせいであ
の武偵 神崎・H・アリア に出会ってしまうのだから

約一時間後

「キンジ、何で起こしてくれないんだよ」

「いや、起こさないって言ってたし一回起こそうとしたよ」

「一回だけじゃなく何度も起こせよ。つーかなぜ二度寝してないお
前も遅刻しそうになってんだよ」

「メールチェックしてたらゲンが起きて時間にきずいたんだよ」

ちなみに俺とキンジはチャリで走行中だ。

「そのチャリ二台には爆弾が仕掛けてありやがります」

「キンジ、変なこと言うなよ」

「ゲンおれじゃないぞ」

「そりゃそうだら後ろからきこえるし」

「だったら言うなよ」

「チャリを降りやがったり減速させやがると爆発しやがります」

「キンジ、と、とりあえず連絡を・・・」助けを求めているけませ
ん。ケータイをしよう使用した場合も爆発しやがります」ですよね
」

「何のイタズラだっ！」

（正直俺一人だったら楽に潰せるのに通常モードのキンジが一緒じゃあ下手に動けないなあ、せめてキンジがあれになっていたら楽だったのに・・・この状況どうしようか）

あれ、女子寮の屋上になにかいるぞ。って飛び降りやがった

「バツ、バカ！来るな！この自転車には爆弾がー」

「クソッ、キンジ二度寝せずに今日の天気予報ちゃんと見ればよかった女の子が降ってくるとは思わなかったよ」

「ゲン、ふざけたこといつてる場合かよ」

「ほらそのバカ二人！さっさと頭を下げなさいよ！」

「へっ？」「キンジと俺があわせていうと

バリバリバリバリッ！

俺たちが頭を下げるより早く、問答無用でセグウェイを銃撃した！（射撃うまいなあ、つーかあんなの東京武偵校にいたか？って、あれ？こっちに向かってきてるし）

「く、来るなって言っただろ！この自転車には爆薬が仕掛けられている！減速すると爆発するんだ！お、お前も巻き込まれるぞ！」

「キンジの言う通りだこっちに来るな」俺とキンジは慌てていった「ーバカっ！」

女の子はそう言う俺たちのちょうど真ん中あたりの上に陣取ったそして・・・げしっ！俺たちの脳天を力一杯踏みつけてとんだ。じみに痛い

そして女の子はこっちに向けて鋭くUターンしてーぶらん。

逆さづりでこっちに飛んてくる

「マジかよ・・・！」「キンジと俺は青くなっていた。すると少女は俺たちを抱いてそのまま空へいく少しすると

ドガアアアアアアアンツツッ！！！！

爆弾が爆破した。あぶねえあと少しで死んでたな。あゝあ、あのチャリ高かったのに

そのままパラグライダーは体育倉庫に突っ込み俺は途中ではなされ壁に頭をぶつけてしまつて俺の意識は少しとんだ。

「痛ッ、武付け所悪かったか。あれ、キンジはどこだそしてここは・・・体育倉庫か」少しキンジを探していると

俺は見ってしまったキンジが女の子と跳び箱の中にいるところを、だから俺は気づかれないようにすぐに隠れいつも携帯している2つのデジカメで気づかれずに撮った。

（これは面白い写真がとれたぞ。これは使えるぞ主に脅しに）

するとキンジがこちらに気づいた

「ゲンいっておくが俺は何もしてないぞ」

「その娘の服あげといてよく言うよ。まあそれを判断するのはこの写真を見た人だけだ」

俺がニヤニヤしながら片方のデジカメをキンジに見せてやった。

「なっ、その写真消せ！」

「で、キンジこの写真いくらで買う？」まあ片方なくなってももう片方があるから損はないな

「いくらで売ってくれるんだよ」

「今度飯おごってくれたらいいよ」

「交渉成立でいいぞ。早く消せ」よしこれで一食分食費が減ったなそして俺がデータを消すと

「・・・へ・・・へ・・・」

「ーーーー？」

「変態ーーーー」

「さっ、さささっ、サイッター!!」

（お、やっと起きたかケータイで録音しておこう）俺は跳び箱の横に行った

「このチカン！恩知らず！人でなし！」キンジがかなり責められてる

「ち、違う！こ、これは、俺が、やったんじゃない！」

キンジがちょうどな！といったときにセグウェイが14台見えた
「うッ、まだいたのね」少女・・・神崎が言った

するとセグウェイが銃撃してきたから俺は防弾跳び箱の後ろに行った。そして俺の愛銃改造したトカレフTT-33を一つホルスターから抜いてマガジンのチェックをした。チェックしてる途中に

「あんた達もほら！戦いなさい！仮にも武偵校の生徒でしょう」

「むッ、ムリだって！どうすりゃいいんだよ！」

「俺は準備中だ」

「これじゃあ火力負けする！向こうは14台いるわ！」

ズガガガッ！ガキンッ！

神崎が弾切れを起こしたようだ

「やったか」あれ、キンジの声が変わってる。

「射程圏外に追い払っただけよ。ヤツら、並木の向こうに隠れたけど……きつとまたくるわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だよ」やっぱりなったのかよ

「ご褒美に少しだけお姫様にしてあげよう」ほんとキンジはあとで後悔するくせによく言うよな

（よし、準備が整った）俺が行こうとすると跳び箱の中から神崎をお姫様だっこして鋭い眼になったキンジが出てきた

「キンジそのモードになったんだから目標は一人7台な」神崎をおろしたキンジにそう言いながら俺は能力も使うため呪われた眼

アルファ・ステイグマ
複写眼

を解放した。その瞬間俺の眼に朱色の五芒星浮かんだ

「ゲン、右の7台は任せた。俺は左のを叩く」

「わかった」そう言って跳び箱の後ろから出て行った

今日の天気は晴れ時々少女（後書き）

複写眼は『伝説の勇者の伝説』からいただき、能力も少し足しました。（悪いのを）

ここが変だというところがたくさんあると思いますのであつたら感想で教えてくださいm（m

3分どころか1分もかからない40秒クッキング（前書き）

主人公のキャラが安定していません十話くらいしたら安定すると思います

3分どころか1分もかからない40秒クッキング

第2弾

3分どころか1分もかからない40秒クッキング

俺が跳び箱の後ろから出た。セグウェイ7台の方へ走ると「あ、危ない！」とか「アリアが撃たれるよ

りずっといいさ」とか聞こえたが無視し、愛銃トカレフTT-33（以後トカレフ）で自分に当たりそうな銃

弾だけを全弾を使って撃ち落とし、予備のマガジンを持ってきてなかったからホルスターにトカレフ

を収めて腰から 月光、朱雀、陽炎 の三刀を抜き二刀一刀をする。
ここまでの動作15秒

そして刀に複写眼アルファ・ステイグマの能力で風を纏わせ刀身延長し、3台のセグウェイを真つ二つに切った。ここまで30秒、そのあと面倒になり投げナイフ4つを4つのセグウェイのUSIの銃口に思いきり投げるそれまでに飛んでくる銃弾は全て燃やし尽くした。

投げた全て投げナイフが残りのUSIの銃口を貫き壊れた。この時ちょうど40秒そのあと複写眼を解除し、三刀も腰に収めて

「キンジ、こっちはやっと終わったぞってあれ？」何か神崎と口論してるみたいだぞ

「……悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったんだな。……しかし凄いよ、アリアちゃんは一」バギンバギン！

「あたしは高2だ！」

「そのあんた助けたんだから強制猥褻の現行犯逮捕するのを手伝いなさい！」俺の方を睨みながら言ってきた。助けてやったってその後セグウェイ破壊してやったじゃないか

「面倒だから嫌だ」

「そう、あんたもグルだったってわけね」なぜそうなる！？

「そこにいなさい。こいつを逮捕した後逮捕してあげる」

どうせ今のキンジに勝てないだろう

すると案の定、神崎をこかしてキンジがこちらに来た。「逃げるぞ」とキンジに言われ一緒にこの場から逃げていった。

「あんた達逃げるんじゃない！！あんた達二人ともでっかい風穴あけてやるんだからあ」なぜ俺にまで被害が

これが鬼武偵 神崎・H・アリアと俺たちの出会いだった。思い返せばこの出会いが俺を不幸にしてしまったんだろう。

始業式後

「はぁ、複写眼を使ったあととはとても疲れるなあ」ため息をつきな

がら俺が言うと

「別に疲れるだけだったらいいだろ。俺はヒステリアモードのせいで精神的にも疲れた。」

「まあ強猥犯のおかげでセグウェイは破壊出来たんだからいいじゃないか」

「だから強猥なんてしてねえ。ゲンも半分破壊しただろ。あの写真ちゃんと消したんだろうな？」

「ああ、このデジカメから消しておいたよ。ちゃんと奢れよ」デジカメを見せてやる。

「ちゃんと消せてるな。よかった」まあもう片方にあるんだけどねそして俺たちはクラス分けて分けられた2年A組に入り、少し話していると担任が入ってきてそれぞれ席に戻った。

俺は担任が転校生がどうか言っているのを聞き流しつつキンジに何を奢ってもらうかを考えていると

「先生、あたしあの二人の間に座りたい」

何か聞き覚えのある声がしたな前を向くと指でキンジと俺を指す朝に会った神崎がいた。

「よかったなキンジ、ゲンお前らにも春が来たようだぞ。二人で転校生を奪い合え。先生！俺転校生と席変わりますよ」おいしいいいいい武藤てめー命を枯らす冬を呼び込むなあああ

「最近の女子高生は積極的ね、武藤君変わってあげて」先生も承諾するなああそして拍手なんてしないでくれえええええ

「先生！あんなチビの隣なんて嫌です！！」俺が神崎を指差して言う

「あんたに決定権はない！」り、理不尽だああああ

「キンジ、これさっきのベルト」神崎がキンジにベルトを投げてキンジがキャッチすると

「理子わかった！わかつちやた！ーこれフラグばっきばきに立ってるよ」理子ナイス教室の皆も盛り上がってきたぞ

「先生、俺、キンジと神崎の愛を邪魔なんてしたくないんでーーー俺がいつてる途中に神崎がガバメントを抜き

ずぎゅんずぎゅん！壁に撃った。そして教室は静まりかえり

「れ、恋愛なんてくだらない！そんな馬鹿なこと言うやつにはーーー風穴を開けるわよ」神崎が顔を真っ赤にしていた

神様助けてええええええええええ心の中かで俺は絶叫した。

奴隷制度復活のお知らせ（前書き）

やはりキャラが安定してない

奴隷制度復活のお知らせ

第3弾 奴隷制度復活のお知らせ

あの後俺は「キンジにとられたな」とか色々言われるのを我慢して屋上に逃げこむと聞き覚えのあるアニメ声がした。俺はとっさに隠れて盗聴させてもらった。

「ねえ、遠山キンジと海山玄武ってどんな武偵？」
何！？俺たちのことを探っているのかよ

「遠山君は昔は強襲科のSランクですごかったよ。で海山君は今は探偵科だけをやってるけど1年の頃はSSR以外の学科全てしてて人間離れしていたよ」

おい、俺は一応人間だぞ人間離れなどなんてこの眼ぐらいだぞ！ま、この眼は知らないんだろうからこの眼なしで人間離れだと言われてるんだろうな……ひどすぎる

「キンジはやっぱりSランクだったのね。ゲンの方はSSR以外と言うところだけが疑問ね」

ヤバイ、このままじゃあアルファ・ステイグマ複写眼の秘密が知られる！しかもこっちに向かってくるぞ戻るか

「待ちなさい」え、マジかよ気づいてたのかよ……逃げるか俺はとっさに走って逃げていくと

「待ちなさいって言ってるでしょ」
神崎がおってきた。だが俺は止まらずに走った。しばらくしてまくことができた。

学校が終わりキンジと部屋に戻って俺はトカレフの整備をしていると、キンジはソファアに座って考え事をしていた。おそらく今朝の武偵殺しの模倣犯のことだろう

「なあゲンあの爆弾は俺たちを狙ったのかそれとも無差別だったのかどっちだと思う？」

「さあ、俺にはわからないな。そもそもあれは模倣犯だったのか本物だったのかが気になる」

ピンポーン

「武偵殺しはつかまったんじゃないのか？」インターホンは無視するのか

ピンポンピンポーン

「捕まったがあれは本当の武偵殺しじゃなかったとか？」俺も無視した

ピポピポピポピポピンポーン

「ああうるさいな！」とうとうキンジが諦めた

「誰だよ？」本当に誰だろう星伽だったらこんなに押さないだろうし……

「おそい！あたしがチャイムをならしたら5秒以内に出ること！」こ…このアニメ声はまさか…俺がトカレフをおいて見てみると

「「か、神崎！？」」俺とキンジはハモっていった

「二人ともアリアでいいわよ」いやいやそんなんじゃくてここ男子寮……

「お、おい！」キンジが止めようとしたがかわされた

「まて！勝手にいるな！」俺が言うと

「トランクを中に運んどきなさい！ねえ、トイレどこ？」アリアがキングに向かっていった

キンジが答えるより早くトイレを見つけて入っていった

キンジがトランクを玄関にいている途中にアリアが出てきて

「あんた達ここ二人部屋なの？」　いったあと中まで入ってきやがった

「まあいいわ」何がいいんだよ

そしてひらりと回り俺たちの方を向いていった

「キンジ、ゲン。あんた達、あたしのドレイになりなさい！」
 ……俺とキンジは絶句していた。

あれ？日本って奴隷制度復活してたっけ？ていうか神様 助けてえ
ええええええええ

ドレイ||パーティーの一員でした(前書き)

最近受験生なのに睡眠時間と勉強時間を潰して書いてるからかなりヤバイ。この調子だと高専に入れない……まあ勉強何てするきなかったからいいけど

ドレイパーパーティーの一員でした

第4弾 ドレイパーパーティーの一員でした

「ほら！さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！無礼なヤツね！」

いやいや、いきなり来てドレイになりなさい！とか言っただけには無礼とかさすがに言われたくないよ。

「コーヒー、エスプレッソ、ルンゴ、ドッピオ！砂糖はカナ1分以内！」そんなのここにあるわけないだろ

キンジがインスタントコーヒーを持っていった。そこで俺はトイレに行った。そしてトイレから出てきてすぐに

「おなかすいた」とか言いやがった

「何か食べ物はないの？」聞かれたから俺は

「ない」と言ってやった。

「普段どうしてんのよ？」コンビニで買っているとキンジが言っただけやあ行きましようとかになっただけでコンビニに行くことになった。そしてコンビニから帰ってきてキンジが

「ていうかドレイってどういうことだよ」とか言った

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活

動をするの」

「嫌だ。なんで強襲科に戻らなきゃならないんだ？」俺が言うと

「あんたのその眼の秘密をばらされなくなかったら従いなさい」

おかしいなアルファ・ステイグマ複写眼のことは親父が表から消してたはずんだけどな。裏のやつらは知ってるがなってことはブラフそれともどっかの組織の一員だな

「ゲンの眼の秘密？」なんだかキンジは興味を示してるようだ。

「その眼になったら、いろんな種類の超能力が使えるのよ。実際の眼になってから超能力を使ってたし、そして1年の頃はSSR以外の学科全てをとっていた。それはもう超能力はかなりの種類使えるってことよ」

何か色々違うこともあったけどまあ大体あってるな。実際複写眼になったら色々使えるし。まああのとときだけの推測だったらできてる方だな。

「おおよくわかったな。良くできました」これ以上調べられてもしばれたら嫌だから適当にいておいた

「で、キンジは強襲科に戻るのか？」話を変えてキンジに聞いてみた

「何言ってるんだ。俺は強襲科が嫌だったから一番まともな探偵科に転科したんだぞ。ムリだ」

そういうことはわかってたよ。キンジが強襲科に戻ることもなんて

うありえない。俺ももう強襲科に行きたくない

「あたしには嫌いな言葉が3つあるわ」

「人のはなし聞けよ」

「『無理』『疲れた』『面倒くさい』この3つは人間の可能性を押し止めるよくない言葉。私の前で二度と使わないで」あ、この3つ全部俺のよく言う言葉だ。

「キンジとゲンは私と同じフロントがいいわ」

どうせやるならフロントじゃなくてセンターがいいんだけどな

「よくない。なんで俺なんだ」

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」キンジいいかんげんにアリアとの会話が成立しないのを理解しろよ

「キンジは質問ばっかで子供みたい。仮にも武偵なら少しはゲンを見習って考えなさい」

キンジも子供みたいな容姿のアリアには言われたくないだろ。

もう俺はどうでもよくなったからアリアはキンジに任せてトカレフの整備を再開した

「とにかく帰れ。」「そのうちね」「そのうちっていつだよ」

「キンジとゲンが強襲科であたしのパーティーに入ると言うまで」

キンジとアリアが話していた

「もう夜だぞ？」

「何がなんでも入ってもらうわ。私にはもう時間がないの。うんと言わないなら」

もう時間がない？ ということだ整備終わったし今から調べてみるか…明日にしよう

「言わねーよ。なら、どうするつもりだ？」

「言わないなら、泊まってくから」ちよつ、本当に神様がいるならこの状況どうにかしてくれよ

「絶対ダメだ！ 帰れうえっ」

「そうだキンジの言う通りだ。ここは男子寮だぞ。もしばれたら二人が連れ込んだ。とか言われるだろうが！ 帰れっ！！」

「出てけ！」この台詞は俺のでもなくキンジのでもなくアリアのだった。

「なんで俺たちが出ていかなくちやならない！ ここはお前の部屋か！」

「分らず屋にはおしおきよ！ しばらく戻ってくるな！」面倒くさいから俺は抵抗せずに出てコンビニに行った

俺が何をしてこうなったんだよ。これも全てこの眼のせいだ。この

呪われている眼の……

ヤンデレ来る(前書き)

今回は速攻で作ったので少ないです。

変な点があれば教えて下さい m
〔 m

ヤンデレ来る

第5弾 ヤンデレ来る

コンビニで時間を潰したあと俺はジャンプをキンジはコミックを買って部屋に戻った。

「キンジ、慎重にはいるぞ。何かヤバい気配がする」本気でヤバい気がしたからキンジに言った

「ああわかった。」キンジが返事をして俺たちは犯罪者の根城に侵入するときと同じくらい緊張して入った。

「キンジ、気を付けろアリアがいないもしかしたら襲われるぞ。」体に今までにないほど緊張を走らせた。

「なに、ゲン、アリアは帰ったんじゃないのか？」

「いや、ここに気配が3つあるから間違いない。俺とキンジとアリアだ。」

「どこにいるんだ？」キンジも緊張していた

「ちょうど風呂辺りだ………ってまさか風呂にはいつてるのか？」キンジの方を見ると風呂場の方にいた。

「ゲン、ア、アリアが風呂にいやがるぞ」やっぱりか

そこでピン、ポーン、チャイムが鳴った。この押方はまさかな、何

てタイミングできやがる！

「キンジ、俺が対処しといてやる！そっちは任せたぞ！」そう言つて俺はドアを開けた

「あ、キンちゃん？なんだゲン君か：ゲン君、キンちゃんは？」なんだってなんだよ。ひでーな

「キンジは今デート中だ。用件は？」からかうつもりで言ってみた。

「ゲン君、キンちゃんはどこに言ったの？」

ドス黒いオーラを出して言ってきた。こ、怖えええええええ

「キンジが白雪様を見捨てるわけじゃないじゃないですか。キンジは今風呂に入っています。からかっただけです。すいません。どうか殺さないでください」

「もう冗談きついよ。人殺しちゃうところだったじゃないの。じゃあお風呂から上がってきたらこれ渡しておいてね」

ひ、人を殺すって相変わらずすごい怖いなあ

「はいわかりました。渡しておきます。」ここで水の音が聞こえた。

（キンジ、もう少し風呂場に来てくれそして白雪、早く帰ってくれ）

「水の音聞こえてきたしキンちゃんに会っていいのかな」もう勘弁してくれ

「いや、キンジは上がったら全裸で出てくるからやめてやってくれ、じゃあまたな」

「ぜ、全裸。じゃあ帰るね」そう言ってやっと帰ってくれた。

最悪の事態だけは避けれたな。よし、次は………そこでキンジが全裸のアリアに跳び膝げりをくらって飛んできた。

「あ、俺死んだな」そう呟いた瞬間俺は頭に跳び膝げりをくらって意識がとおのいた。

神様せっかく白雪を追い返せたのにこれはねえよ。

ヤンデレ来る(後書き)

早くハイジャックまでいきたいなあ

深追いは危険（前書き）

もうサブタイ何て思い付かないよ。誰か助けてえええええええ

深追いは危険

第5弾 深追いは危険

目が覚めるともう朝だった。

「あれ？俺なんでこんなところで寝てんだ？たしか昨日白雪を追い返してから…き、記憶がないだと」

白雪を追い返してからの記憶が失っていた。

「あら、ゲンも起きたの。ちょうどいいわキンジに朝御飯を出してっていつてちょうだい」

「なあキンジ今何時だ？っていうか昨日白雪を追い返してからの記憶がないんだけど俺って何かしたか？」

アリアを無視して聞いた。

「アリアに蹴られて気絶してたぞ。後今7時半だ。」な～んだアリアに蹴られて気絶してたのか～、って

「なんで俺蹴られてたんだよ！？」アリアをにらみながら言った。

「あんたが見たからよっ！！」鬼の形相でにらみ返してきた。こ、怖いなく、俺ってなにか見たのか？

「あ、俺もう学校いくわ。じゃあな」俺はそう言って逃げるように

玄関からでた。

「待ちなさい逃げるなっ」そういう言葉だけ聞こえたが、無視して行った。

だが目的地は学校ではなく情報科女子寮のSランクであるとする引きこもりの部屋に向かった。インフォルマ

「はあはあ、くそっ、こんなに遠かったっけ情報科女子寮って」息切れしながら情報科女子寮の前に来た。

そして引きこもりの部屋に向かった。

え、どうして学校に行かなくてSランクだっけ？そんなの俺が聞きたいよ。

「香織くどうせいるだろう、出てこい」ドアをノックしていった

「開いてるからさっさと入ってこい。準備はしといてやった」中から声がした

「じゃあ入るわ、お邪魔しますっつと。準備済ませてくれたのか、ありがとな。後で面白い写真見せてやるよ。」

中に入ると茶髪をしたポニーテールのまあまあ可愛い子紅崎香織が色々な機械の前にいた。アカサキカオリ

「別にそんなの見せなくてもいい。さっさと用事済ませてどっか行け。」

「ああ、じゃあ使わせてもらおうよ。」

俺がここに来たのはアリアが時間がないっていった理由を調べるためだ。

色々なことを調べてるとアリアの母、神崎かなえさんが不当逮捕されたのを知った。誰がそんなことしたのかも調べてみた。するとイ・ウーという単語にたどり着いた。

「香織、イ・ウーって何かわかるか？」疑問に思った俺は香織に聞いてみた。

「イ・ウー？なにそれ何かの犯罪組織かなにか？ちょっと調べてみるわ」

そう言って香織がノートパソコンを取り出して調べ始めた。

「ゲン、イ・ウーには関わらない方がいいわ。これは危険すぎる。
アルファ・ステイグマ
たとえ複写眼を使っても勝てないかもしれない化け物がたくさんいるわ」

珍しく真面目な声で香織が言ってきた。

「なんだよ。イ・ウーってなんなんだ？複写眼使っても勝てないかもってかなりヤバイ組織なのかよ」

「ええ、かなりヤバイわ。イ・ウーって化け物生産場みたいなものよ」マジかよ

「わかった。出きるだけ関わらないようにするよ。調べたいのは調

べたから証拠隠滅して学校行くよ」

「ゲンはたまにミスするから私が隠滅しとくからさっさと学校に行
ってきなさいもう二時間目辺りよ」

「ありがとな」俺はそう言ってから香織の部屋を出た。

（イ・ウー、か……後で独自で調べるか）

そう考えながら学校へ向かって歩いた。

深追いは危険（後書き）

一応オリキャラのプロフィール書いときます。

紅崎香織

インフォルマ
情報科

備考

一応ポニーテールの美少女で、調べようと思ったら何でも調べられる实力を持つ。

ゲンとは幼馴染み。学校に行かなくてSランクをとっている。

たぶん今回は一杯あると思うので、おかしいところがあれば教えてください
m (m

勝てない戦闘はすごく疲れる（前書き）

緋弾のアリア最新刊12月の終盤に出るってクラスメイト言ってたけどそれってホントなの……………

嘘だったらあいつをばこばこに……………

勝てない戦闘はすごく疲れる

第6弾 勝てない戦闘はすごく疲れる

走って学校に向かっていている途中もうこれ遅刻してるんだし別にのんびり行ってもよくねということに気づいて歩きだした。

「ねえその君、君って海山玄武君だよ」歩きだしてすぐに西欧風な服を着た人に声をかけられた。

「そうですけどあなたは誰ですか？用があるなら早く済ませてくだ
さい学校に行くんで」

「僕は教授と名乗っておこう。僕の用事は君にイ・ウーに来てもら
うことだよ」
プロフェシオン

「な！？イ・ウーだと！？お前イ・ウーの一員か。なぜ俺にイ・ウー
ーに来てほしいんだ？お前もしかしてホモか？」

「ホモ？よくわからないけど僕は君のその眼に興味があるんだ。そ
の呪われた眼アルファ・ステイグマ複写眼にね。」

「なるほど複写眼狙いか。イ・ウーはこれを使っても勝てない化け
物がいるとか言ってたな」

「誰に聞いたか知らないけどその通りだよ。君は僕には勝てない。
だから抵抗せずに来てくれたら嬉しいのだけど」

「断る。犯罪者になったりしたら武偵三倍刑で死ぬからな」俺はそう言ってから複写眼を発動した。

「それが複写眼かい？噂どおりの朱色だね。」教授がそう言う。教授から殺気を感じた。

（あ、これマジで俺一人じゃ勝てないな。逃げることでできないかな）そう思いながらトカレフを二丁抜いた。

「これだけの殺気向けられて動けるのは流石だね。やっぱり君にはイ・ウーに来てもらうよ。」

その瞬間俺はトカレフを二丁同時に撃った。するといつの間にか持っていた剣で銃弾が切られた。

「マジかよ銃弾切るってスゲーな。こりゃマジでヤバイ！」そう言うといきなりライフルの弾が飛んできた。それをとっさに避けてトカレフをしまつて月光、朱雀、陽炎を抜いて二刀一ダブルエッジアンドエッジ刀をして切りかかった。

「君だってライフルの弾を避けたじゃないか」教授はそう言って剣で複写眼でできる能力で強化している月光と朱雀を受け止めて弾いてきた。

「なっ！強化してるのになんで弾けるんだよ普通だったらその剣ごと切り裂いてるはずだぞ！」

刀と剣が打ち合いながら俺が言った。

「使ってる人の腕がよければ剣はいくらでも強くなるからね」

「自分のことを腕がいいってよっぽどの自信家だな！」まあ実際に弾いてるからそう言うのはわかるけど

「勝てないし今から能力ばかり使わせてもらおう」そう言って後退してから刀をしまって炎と雷を放った。

「そう来るのは推理できてたよ。」そう言って避けて水を放ってきやがった。

「お前も使うのかよ。ヤバいこれ勝てない」水の構成を読み取り無効化した。そして今度は風で鎌鼬を全体に放った

「水が消えたのは複写眼の能力かな？そろそろ諦めてイ・ウーに来てくれないかな？」そう言いながら剣で鎌鼬を切り裂きやがった。

「もう四分たったし長期戦になると勝てないから逃げさせてもらおうよ」

そう言って俺は投げナイフを適当な方向に投げて、風で軌道を操って教授に全方向からの攻撃を浴びせた。だがすべて剣で弾かれた。その時にも全くといっていいほどスキがなかった。

「逃がすわけにはいかないよ。君はイ・ウーにつれていく」

くそっ、こんなところでゲームオーバーなんてなりたくねえぞ。どうすればやつから逃げれる！？

「万策つきたようだね。悪いけど今度はこちらから行くよ」

最悪のタイミングで教授の方から攻めてきた。刀をしまってるから選択肢は回避しか残ってない。

「や、やべえマジでこいつ強すぎる。」回避が遅れて剣に片腕を深く切られた。

「ほら、もうイ・ウーに来た方がいいんじゃないかな？今ならその傷も直してあげるよ」

「断る。犯罪者になる訳にはいかねえ」その時いつの間にか背後にいた教授が剣を降り下ろしていた。

「くそっ……………」諦めて眼を閉じた時に急に眼が熱くなって意識が途切れた。

しばらくして…………

「ここはどこだ？死んだのか？たしかさっきまで教授と名乗る男と戦ってやられかけて急に眼が熱くなって…………」

「まさか勝手に複写眼が勝手になにかを発動したのか!？」とりあえず起き上がろうとした。

「よし、まだ筋肉痛で動かねえ何てことはないな」

「早いところこの真っ暗な部屋から出ないとな」ドアがないか手探りで調べた。

「あ、ドアノブがあったぞ」開けてみると目の前に見覚えのある色々な機械があった。

「あれ？ここって香織の……もしかして複写眼が勝手に使ったのって瞬間移動か！」
テレポート

「な、なんでゲンがこんなところにいるのよ!？」横から声がしたから見てみると風呂上がりから裸の香織がいた。

勝てない戦闘はすごく疲れる（後書き）

はい教授に出くわしました。もちろんイ・ウーに誘いに：ってか瞬間移動使えるなら早く使えよ！っていう人もいると思いますが、戦闘シーンを自分がどれだけ書けるか知りたいと思ったので書いてみました。もう自分でも意味がわからなくなってしまいました。

おかしいところがあれば教えてください m () m

裸の価値がわからない（前書き）

もう自分でも何を書いているのかわからなくなっちゃった

裸の価値がわからない

第7弾 裸の価値がわからない

「えーと、襲われて戦ってやられて勝手にアルファ・ステイグアレポート複写眼が瞬間移動を使っ
てここに来ちゃったかな？」

子供の頃お風呂とか一緒に入ったことがあるから別に気にせず言っ
た。

「あなた、人の裸見という謝りもしないの？」 恐ろしい声で言っ
てきた。

「お前の裸なんて子供の頃に見たことあるんだし、別に気にしない。
でも一応謝っとくゴメン」

「こ、子供の頃ってずいぶんと昔じゃない！今私たちは高校生よ！
成長してるの！わかる！？」

着替えた香織がイライラした声で言ってきた。

「別に大事なところは見てないから大丈夫だ。そんなことより今何時
だ？」

香織が風呂に入ってたということはそれほどの時間であろう

「そんなことよりってなに？人の裸見という平然としながら言う台
詞？ちょっと一回死んでよ」

一回死んでよってずいぶんと怒ってるなあ

「そういや、さっきの戦闘で片腕を深く切られたんだよ。今はとっさの止血として凍らせてるけど溶けるだろうから救急箱用意してくれ。」

「話をそらさないでくれる？ ゲン、あなた怒られてるって解ってるの？」

まだこの話続くの？ もう面倒くさいよ

それから十分が経って俺が慰謝料20万払った後、自分の記憶を消すというので話がまとまった。

「で、襲われたって誰に襲われたのよ？ この傷から見ると剣の達人かなにかかしら？」

まだ血が凍っているが、包帯を巻きながら香織が言ってきた。

「化け物に襲われたんだよ。イ・ウーの一員のたしか：教授とかい
プロフェッショナル
うヤツにやられた。」

「イ・ウーって今朝調べて、複写眼使っても勝てないやつがたくさんいるって言ったじゃないの」

「あっちから戦闘しに来たんだ。イ・ウーに来てほしいんだよとか言っ
ていきなり殺気を向けられたり」

「複写眼が勝手に能力使ってくれたおかげで死なずに済んでよかったわね。もう8時だから帰って記憶消しなさい」

「複写眼使いすぎて今日と明日たぶん複写眼使えないから明後日消すよ。じゃあ帰るよ」

「ちゃんと消しなさいよ。」そういわれてから俺は香織の部屋から出た。

「さっさと部屋に戻って筋肉痛になってもいい状態にしとかないと」俺は走って部屋に向かった。しばらくして部屋の前に着いた。ドアを開けると……

「ゲン！あんた先に行つてるとか言つといて学校休んだわね！どういうことか説明しなさい！」

アリアがこちらを見てから言った。傷がばれると面倒だからそつとてを隠した。

（アリアのこと調べたとかいうと風穴を開けられるよな……）

「ひ、秘密の特訓をしてたんだよ。そんなことより明日筋肉痛になつて動けないと思うから学校休む。後明日は一回もさわるな」

適当に言い訳を言って、言うべきことを言った。

「そんなにきつい特訓をして来たのね。それならキンジと猫探しじゃなくてあんたを見てた方がよかったわ。」

「風呂入ってからすぐに寝るからソファーからどいよけよ。」

「お風呂には今キンジが入ってるわ。特訓って何をしたか教えなさい！」

「秘密って言っただろうが。教えれない」まあ、教えられないんだけど……

「いいから教えなさい！これは命令よ！」ベストタイミングでキンジが上がってきた。

「ゲン、お前今日どこに行ってたんだよ。一人でアリアの相手することになったんだぞ。」

「ゴメン、特訓をしてたんだよ」そう言ってから風呂に行った。

風呂から上がるとキンジに本当は何してたんだよと聞かれたが特訓だよと言ってからソファで寝た

次の日

眼が覚めたが案の定全身が動けなかった。アリアもキンジもいないところから見ると二人とも学校に行ったのだろう。寝てこの日を過ごした。

裸の価値がわからない（後書き）

ここまで来たのはいいけど、なんかもうおかしすぎる。

せめてバスジャックは変にならないようにします。

なにかに熱中していると時間が流れるのは早い（前書き）

あれ？本編に触れてないぞ？一体僕は何をしてるんだろう？

なにかに熱中してると時間が流れるのは早い

第8弾 なにかに熱中してると時間が流れるのは早い

そのまた次の日の朝

「ゲン起きろ。朝だぞ」キンジが言ってきた。

「まだ7時だぞ。もう少し寝かせろ」

「昨日あれだけ寝てたんだからいいだろ。そんなことよりアリアに戻ってもらえたぞ！」

「え？マジかあいつ戻ったのか。やったな。一体どうやったんだ？」

「俺とゲンが一回だけ強襲科アサルトに戻って一件だけ事件をやればいいらしい」

「おいキンジ、今なんて言った？俺が強襲科に戻るだと………しかも一件だけ事件をするだと………？」

「よしナイスだ！それくらいでいなくなるんだったらお安いご用だ！で、その一件って何だ？」

「ゲンいいのか？強襲科に戻るの。いやがると思ってたのに……あと、まだ一件は決めてないらしい」

「別に嫌じゃないってのは嘘になるけどアリアがいなくなるんだっ
たら話は別だ。いつからだ？」

「今日からだ。あと昨日アリアのことを理子に調べてもらってわか
ったけどあいつ貴族だったらしい」

「そんなこと前から知ってる。俺も大体は調べた。そんなことより
朝飯食わねえか昨日なにも食ってないから腹へってんだよ。」

「朝飯何てないぞ」……え？マジかこれ教授と戦ったときよりヤ
バイぞ

「おいおいおいおいおいちよつと待て昨日なに食ったんだ
よ残り物くらいあるだろ。」

「いや、全くない」神様あああ、俺に食い物をくれえええええ

「あ、忘れてたしたのコンビニで買えばいいじゃないか。キンジコ
ンビニ行ってくる」

そう言ってコンビニに行ってから弁当を5つ買ってから戻ってきた

「よし、朝飯を食うか」

「いやお前それ全部食うのか？食い過ぎだろ。体に悪いぞ」

「大丈夫だ問題ないこれくらい五分で食える」まあ実際そんなにか
からないが

「食えすぎだろ。そういや一昨日なにやってたんだ？特訓なんてし

てないだろ」

「調べごととしてた。」調べごととしてたのは事実だったから言った

「眼を五分も使ってたか？」

「その後特訓してたんだよ」

「まあ別にいいが」別にいいんだったら聞くなよ

そう思っているうちにも弁当が残りひとつになった

「キンジそろそろバスの時間だな。よしいくか」弁当を食い尽くして言った。

学校でエリアにキンジから言われたことを言われた。一般科目も終わって専門科目の時間になった。

俺はキンジと共に強襲科の専門棟にむかった。

専門棟に入ると死ね死ね団のやつらに絡まれたあとやっと訓練ができるようになった。

「キンジ、俺はもう死ね死ね団と話すだけで疲れたんだが……もう帰っていいか？」

「ダメだろ帰ってエリアの怒りを買ってまた部屋に来たらどうすんだよ」

「ああそうか」軽く準備運動をしながら答えた。

「俺は射撃でもやっておくからまたあとでな」そう言ってから俺はキンジと別れた。

気づいたらいつの間にか6時になっていた

「キンジにおいていかれてしまってるし！」そして帰った。

なにかに熱中していると時間が流れるのは早い（後書き）

後半適当ですが許してください。早く進めたかったんです

リア充はみんな爆発しよう（前書き）

うーん、いまいちうまくできない

リア充はみんな爆発しよう

第9弾 リア充はみんな爆発しよう

「キンジ、帰るなら帰るって言うてくれよ。気づいたら俺一人だったから悲しかったじゃないか」

「ゲンが射撃に熱中してたんだろ」

「だからって置いてかないでくれよ。で、何してたんだ？」

「ゲーセンで遊ぼうとしたらアリアがついてきた。」ってことはデートしたってことか……

「リア充は爆発しろ！」自分の正直な思いが言葉に出てしまった。

「リア充なんかじゃねえよ！アリアに邪魔されたところのどこがリア充なんだよ！」

これだからリア充は自覚もなしにフラグを建てるから困るよ。

「俺の頭の中じゃ、デートする＝リア充 なんだよ！だからキンジ俺のために爆発してくれ。死体処理はしといてやる白雪にばれずに」

「なんだその方程式は！？しかもデートじゃない！」キンジが本気で抗議してきた。

「そういうやつほど怪しいんだよ。なんだそのケータイストラップは？アリアからのプレゼントか？」

俺がそう言うのとキンジが少し黙った。あれ？もしかして本当にプレゼントか？

「キンジ、とりあえず手榴弾持ってくるよ。心の準備をしといてよ。今日が最後の日だ」

「ちょっと待て！別にプレゼントなんかじゃないんだ！これは俺がアリアのためにやったときに2つ落ちたから1つあげるって言われて……………」

「キンジ、人はそれをプレゼントと言うのだよ。諦めて爆発しようほら手榴弾なかったから代わりにこの武偵弾使っていいから」

そう言って俺は炸裂弾^{グレネード}をキンジに差し出した。

「いやいや、もう面倒だったけどはじめから話すよ」そうして10分間キンジの話を聞いた。

「言いたいことはそれだけか？」

「ああこれだけだ。」キンジがこれで助かる的な顔をしていた。

「キンジ、その話をして助かると思ったのか？人はそれをデートとよんでいるんだ」

「どうやったらそうなる！？」

「ゲーセン一緒に行ってクレインゲームしてとれたのを分けた。あとそれを二人で一緒にケータイにつけるところだ。」

ここで俺のケータイに着信が来た。チツ運のいいやつだぜ見ると香織からだった

「なんだ？ なにかようか？」俺がキンジとの話を切り上げて自室に行ってから応答した。

「ゲン、記憶ちゃんと消したんでしようね？ まだ慰謝料振り込まれてないんだけど？」

あ、すっかり忘れてたなあ。もう消したってことにしとくか

「何の記憶を消すんだ？ 慰謝料って何か悪いことでもしたか？」

「その様子だと消したみたいね。とりあえず20万よこしなさい」

「よくわからないが悪いことしたんだな……明日にでも渡すよ」我ながらいい演技だ。

「わかったわ、明日ちゃんと持ってきてきなさいよ」そういつてきてから電話を切られた。

（まだ覚えてたのかよ支出がすごいな。）

もうキンジをいじるほど体力ないからもう風呂入って寝よう

「キンジもう眠いし風呂は行って寝るわ」アクビをしながら言う

「ああ、わかった」キンジは助かったという顔をしていた

そして寝た。次の日にあんなことが起きるのも知らずに……

リア充はみんな爆発しよう（後書き）

やっとな次にバスジャック

理子のチート技とか考えてくれればありがたいです。

バスに乗り遅れると事件が待っている(前書き)

結構少ない目です

バスに乗り遅れると事件が待っている

第10弾 バスに乗り遅れると事件が待っている

朝起きるとまだキンジは寝ていた。だから二度寝した。

「ゲン起きろもう朝だぞ」キンジが起こしに来た。

「ああ、わかった。今日は雨か……今日は学校休むわ。お休み」

「ボケてないで起きろ。まだ少し時間あるが着替えたりしなきゃダメだろ」キンジが言ってくる

「お前は俺のお母さんかよ。わかったよ起きればいいんだろ」俺は起きてから着替え始めた

「キンジ、今何時だ？」

「今は7時50分だ。そろそろ行かないと、雨降ってるし乗れなくなるぞ」

「じゃあ行くか」準備をした俺が言った。

「キンジ、なんで7時58分に来るバスがもう来てこんなにも人がいるんだ？」

「わからないが急ぐぞ」俺とキンジは走った

「やった！乗れた！おうキンジとゲンおはようー！」嫌みな顔で武藤が言ってきた。

「武藤、乗せろ！チャリ爆破されてないからこれ乗れなかったら遅刻しちまう！」キンジが言った

「無理だ！キンジ、男は思いきりが大事だぜ？1時間目フケちゃえよ！というわけで2時間目にまた会おう」

「武藤、学校に着いたら絶対にお前を三枚下ろしにしてやる！」俺が言ったがバスは扉を閉めて出発した。

「キンジ、どうする？今日はやっぱり休むか？」

「いや学校には行くよ」

「じゃあ歩いていくか。面倒くさいけど……」そして俺たちは歩き始めた。

強襲科アサルトの黒い体育館を横切ろうとすると、キンジのケータイが鳴った。

「強襲科のそばだ」「ゲンならとなりにいるぞ」「なんだよ。強襲科の授業は五時間目からだろ」

とかキンジが言ったあとにキンジがケータイをしまった。

「ゲン、いますぐC装備に武装して女子寮の屋上に行くぞ！事件だ！」

「キンジそれってアリアから？」俺が言った

「ああ、そうだ。約束した一件の事件だ」C装備って結構きつい事件だな

俺たちはC装備に着替えた

「キンジ、C装備結構動きづらいんだが。制服じゃあダメなのか？」俺が聞いた

「アリアが絶対に許さないと思うからC装備でいてくれ」はあ、これ動きづらすぎるだろ

「女子寮の屋上に行くんだっけ？早くいこうぜ」俺が自分の姿を苦々しく見ているキンジに言った。

「ああ、行くか」そうして俺たちは女子寮の屋上に向かった。

バスに乗り遅れると事件が待っている（後書き）

次回やっとなバスジャックできるだけ早く投稿します。

理子のチート技募集中。このままでは理子が丸坊主になって、切り刻まれてしまう

友達を見捨てると神に見捨てられる

第11弾 友達を見捨てると神に見捨てられる

屋上に到着すると、C装備をしているアリアがいた。そして、階段の方には、レキがいた。

「おいアリア、無線機なんて使ってなにしてんだよ。」俺がアリアに聞いた。

「今、他のSランク武偵と連絡とろうとしてるのよ」イライラした声で言ってきた。

「その様子からすると、一人もこられないのか？」

「みんな他の事件で出払っているみたい。だからもう時間切れね。」

「4人パーティーで追跡するわよ。火力不足は私が補う」

「追跡ってなんなんだ？何が起きたのか状況説明ぐらいしてくれ」
フリーファイニング

俺がアリアに言った。

「バスジャックよ」「ーバス？」アリアが言ったのにキンジが反応した。

「武偵高の通学バスよ。あんたたちのマンションの前にも7時58分に停留したハズのやつ」

（ハッハッハ、武藤め、ざまーみやがれ友達を見捨てたから神に見捨てられるんだよ。）

「犯人は車内にいるのか？」キンジが聞いた

「たぶんいないでしょうね。バスには爆弾が仕掛けられてるわ」

「最初の武偵はバイク、次がカー、そしてその次があんたたちのチャリ、今回がバス……ヤツは毎回『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作を使う電波にパターンがあってね。あんたたちを助けたのも電波をキャッチしたのよ。」

「でも『武偵殺し』は逮捕されたはずだぞ」キンジが言った

「それは真犯人じゃないわ」まあ今こんなことになってるしそうだろうな

「お前何の話をしてるんだー」

「そろそろ行かないか？武藤の焦った顔を早くみたいんだが……」俺が話を中断させて言った。

「これが約束の最初の事件になるわね。二人とも実力を見せなさい。楽しみにしてるんだから」

まあ、キンジはヒステリアモードになってないし、俺も複写眼アルファ・ステイグマを使う気なんて全くないがな

そしてヘリに乗ってバスの上まで来た。

「行くわよ。手抜いたりしたら風穴開けるわよ」

そう言っただけで強襲用パラシュートを使いながらバスに乗った。キンジは落ちそうになったがアリアがつかんでくれた。俺はすぐに中に入って武藤の顔を拝みに行った。

「ゲン！」武藤が言ってきた。

「ああ。ちくしょう。なんで俺はこんなバスに乗っちゃったんだ？」

「武藤、友達を見捨てるからこうなるんだよ」

「あれだゲン。あの子」武藤が指を指していたのはいかにも弱そうな女の子だった。

「海山先輩！助けてっ」中等部の後輩のようだ

「何があったんだ？」

「いつの間にか私の携帯がすり替わってたんですっ。それが喋りだして」

「速度を落とすと 爆発しやがります」これは『武偵殺し』だな

「ゲン、状況を報告しなさい！」アリアの声が聞こえてきた。

「お前の言う通り『武偵殺し』の仕業だった。やはり遠隔操作のようだ。そっちは？」

「爆弾っぽいものがあつたわ！」

「それを解体してくれ」

「わかったわ解体を試みーあっ！」アリアの叫びと同時に振動がバスを襲った。

そとを見てみると、5台のオープンカーの座席からUSIを載せた銃座がこちらを向いていた。

「みんな伏せろ！」俺以外の生徒が頭を低くした直後無数の銃弾がこちらに飛んで来た。それをとっさに月光を取りだし自分の頭に当たりそうなものだけ弾いた。体は守ってないから銃弾が当たって、痛かった。

その後バスが妙な揺れかたをした。運転席を見ると運転手が倒れていた。

「武藤！運転代われ！」痛みに構わず俺が言った。

「オレ、あと一点しか違反できないんだぞ！」

「気にするな。全責任は俺がとってやる！……多分」そう言っ
て武藤にヘルメットを渡した。

「キンジ、アリア、大丈夫か！」

「俺は銃弾に当たったがヘルメットを壊された。」

「アリアはどうだ！」

「ヘルメットを壊された。」なんでヘルメットばかりなくなるんだよ。

「俺は右のオープンカー破壊するから、アリアは爆弾を解体してくれ、キンジは左を頼む」

俺がそう言って右のオープンカー三つをトカレフで破壊したその直後

「アリアっ!」「アリアーアリアああっ!」という声がした後レキが左側の破壊して爆弾を外した音が聞こえた。しばらくしてバスが止まった。

そして俺たちの最初の事件が終わった。

尾行って案外難しい(前書き)

うーん。即興で考えるのって難しいよね。他の作家さんは凄いなあ

尾行って案外難しい

第12弾 尾行って案外難しい

事件の後、アリアは武偵病院に入院したが、傷は幸い浅かったようだ。

翌日、香織に金を払った後、個人的にバスジャックを調べてから、一人でアリアの病室に行くと、先にキンジが来ていたようだ。だから、空気を読める俺は先にトイレに行った。戻ってくるとキンジがさえない顔をして出てきた。

「キンジ、どんな話したんだ？」あえて空気を読まず俺は聞いた。

「別に」そう言ってからどっかに行った。俺はアリアの病室に入っ

た。

「おい、アリア元気か？」元気なわけないが言ってみた。

「次から次にわいてくるわね」アリアが失礼なことを言ってきた。

「俺はゴキブリか何かか！」定番の突っ込みをしておいた。

「まあ話を聞け。『武偵殺し』のことだ」

「キンジから聞いたわ。だからもういいわよ。帰って」

「キンジから？ ああ武偵高が調べたやつか。俺は探偵科インゲスタのSランクらしく自力で犯人を推測した。」

「何よ。言ってみなさい。」

「おそらく犯人は、バスに乗っていなかった武偵高の生徒だ。」

「そう言う根拠は何よ」

「狙われているのは武偵、武偵たちの乗るタイミングを計ってた。しかもセグウェイをそこに向かわせている。ってことは乗っている乗り物がどこを通るかの時間帯を知っている。そんなのは武偵高の生徒ぐらいだ。だから俺は犯人は武偵だと推測している。まあ無理矢理のような気もするけどこんなもんだ。」

俺が推測したままに言うのと、驚いた顔でこちらを見ていた。

「じゃあ誰がやったのよ？セグウェイ盗んでまでなんで武偵を殺したのよ」

「さあ、俺にはまだわからねえ。まあまだ調査はするがな」

「役たたず」マジかよ。ここまで言ってあげたのに役たたずって、ひど過ぎるだろ。

「そんなのもお前はわからなかったんだぞ。なんで俺が役たたずって言われなくちゃならねえんだよ」

「うるさい！出てけ！」逆ギレされちゃったよ。

「わかった。出てってやるよ。多分わかり次第教えてやる。多分な」そう言ってから俺は出ていった。

結局何もわからないまま、アリアが退院する日曜日の朝が来た。

「キンジ、なんでそんなことやってんだ？」 キンジが掃除をやっていた。

「考え事しないようにだよ」 ああ、なるほどアリアのことを考えたくないのか。

「『武偵殺し』調べるの面倒くさいし俺も手伝うよ」

「ああ、じゃあ頼む」 そうして昼まで掃除をやっていた。

昼に気分転換のためにキンジを連れて学園島の片隅に連れていった。

「キンジ、あれってアリアだよな？」 アリアっぽい人が美容室から出てきたのを目撃した。

「ああ、そうだな。髪型を誰と会ったろうな」 髪型変えたのって傷を隠すためだよな。

「さあ誰だろうな。そうだキンジ、アリアを尾行しようぜ！」 俺がキンジに言ってみた

「ゲンが行くってなら行く」

「じゃあ行くか」 そう言ってからアリアの尾行が始まった

モノレールの中

「あんな服装してどこ行くんだろ？もしかしたら貴族だし許嫁とかかな？」キンジの反応をうかがった。

「あんな暗い顔していくものか？H家とうまくいってないらしいから多分違うだろ」冷静に言われた。

「まあ尾行してたらわかることだな。」アリアが降りたから俺たちも降りた。

その後、適当な話をしながらアリアを尾行していると新宿警察署についた。

「へったな尾行。シッポがにょろに見えてるわよ」アリアが振り返って言ってきた。

え、マジかよ気づいていたのかよ。まさかここで風穴を開けられるのかよ。

た、助けてくれええええええええええ

尾行って案外難しい（後書き）

武器紹介の時に太刀って書いてましたが、どうやって使うか迷うから、当分は出てこないと思います。

カップ麺の3分は長いが面会の3分は限りなく短い

第13弾 カップ麺の3分は長いが面会の3分は限りなく短い

「お前が前に言っただろ。『質問せず、武偵なら自分で調べなさい』って」キンジがまともな言い訳を言ってくれた。これだと助かるな

「なんだ、気づいていたのか。だったら早く言ってくればよかったのに」俺が言った

「迷ってたのよ。教えるべきか。あんたたちも『武偵殺し』の被害者だから」

「なんだ、『武偵殺し』が関わってるのか。そしてここに来たってことは……謎が解けた。神崎かなえさんとの面会のためにここに来たのか。だったらそんな格好してるのもわかるよ」

「そうよ。ゲンはそんなことまで調べてたようね。どうせ追い払っでもくるんでしょ。だったら行くわよ」

そうして俺たちは入っていった。

「神崎、面会は3分だ」目付きの悪い管理官が言った

「まあアリア、どちらが彼氏さん？」

「ちっ、違うわよママ、コイツらは遠山キンジと海山玄武。武偵高の生徒でそんなのじゃないわ。絶対に」

「キンジさん、玄武さん、初めまして。私アリアの母で神崎かなえと申します。娘がお世話になってるようですね。」アリアと違って礼儀正しく言ってきた。

「あ、いえ」あ、この人キンジが苦手とするタイプだな

「ママ、面会時間が3分しかないから手短に話すわ。このバカ面二人は『武偵殺し』の3、4人目の被害者なの」3分しかないって本当にどれだけ罪重ねられたんだよ。

「まあ」

「それに一昨日はバスジャック事件が起きてる。『武偵殺し』の活動は活発になってるわ。もうすぐシッポを出すでしょうし、こっちのバカ面が『武偵殺し』は武偵高の生徒だとか推理してたし、だからまずは『武偵殺し』を捕まえる。そして、ママをスケープゴートしたイ・ウーのやつらを全員ここにぶちこんでやるわ」

イ・ウーか。なるほどアリアとはそんな繋がりがあったか。ってか全員って教授はかなり難^{プロフェシオン}しいだろ

「アリア。気持ちは嬉しいけど、イ・ウーに挑むのはまだ早いわ『パートナー』は見つけたの？」

「それはまだだけど、誰も、あたしには、ついてこれなくて」

「ダメよアリア、そのままじゃあ自分の能力の半分も出せてないの」あれで半分以下って

「人生はゆっくり歩みなさい。早く走るのは、転ぶものよ」

「神崎、時間だ」

「待っててママ、必ず公判までに真犯人を全員捕まえるから」

「アリア。私の最高裁は、弁護士先生が、一生懸命引き伸ばしてくれるわ。だから落ち着いてパートナーを探すのよ。その額の傷は一人に対応できない証拠よ」

「やだやだやだ！」 「時間だ」 管理官が乱暴に引き剥がした。

「やめろ。ママに乱暴するな！」 その後かなえさんは戻っていった

「訴えてやる。あんな扱い、していいわけがない。絶対………訴えてやる」と独り言を言いながら新宿駅に戻っていた。

その時、俺は考えた。教授と戦って殺されかけたって、言おうかどうかを……結局言わないでおいた。

「アリア……」 キンジの声が聞こえた

「泣いてなんかない」 アリアは顔を伏せて震えていた。

「おい……アリア」

「な……泣いてなんか……」

「うわああああああ……ママあああ……ママああああああ……！」

俺はなにも言えずにアリアのそばに立っていただけだった。

カップ麺の3分は長いが面会の3分は限りなく短い（後書き）

次回からやっとハイジャックに行ける。さてさて、サブタイはどんなのにしようかな

おそらく明日の昼か夜中に投稿します

幼馴染みとその戦姉妹は嫌なところで似ている

第14弾 幼馴染みとその戦姉妹は嫌なところで似ている

結局あの後、泣きやんだアリアが「一人にして」と言ってきたから、あそこで別れた。

週明けの一般科目の授業の時、俺の左隣は空席だった。アリアは学校に来なかった。

インクスタ
探偵科の授業中に寝ようとしていると、携帯にメールが来た。香織からだった。

『ゲン、放課後に部屋に来なさい。『武偵殺し』についてわかったことがあるわ』

というメールが来た。ああわかった放課後に行くと返信しといた。

そして放課後、キンジも誘ってみたがキンジは理子に呼ばれたようだ。よかったあ。俺が理子に呼ばれなくて、俺アイツかなり苦手なんだよな……ってあれ？もしかしてまたキンジはデートに行くんじゃないのか？気づいたときにはもう遅かった。キンジは逝ってしまった。え？漢字間違ってるだって？いいんだよこれで、こっちの方がキンジには似合う

そして俺は香織の部屋に行った。

「おーい、言われた通り来てやったぞ」

「遅いわね、もう6時よ。今夜7時のチャーター便に『武偵殺し』が乗るかもしれないってのにのんきなものね」

なんかいきなり物凄い言い出したぞ。チャーター便に『武偵殺し』が乗るのか…って

「おいそれ、もしかしてハイジャックされるとか言うんじゃないだろうな」

「ハイジャックされると思うわ…：後、あなたが調べてた神崎・H・アリアもそれに乗ってイギリスに帰るようよ」

「アリアが？なるほど、俺たちの実力が残念だったからイギリスでパートナー見つけようって訳か」

「もし行くなら気を付けなさい。『武偵殺し』は遠山キンジの兄、遠山金一をやってしまったてるわ」

「なっ、キンジの兄貴って強かったんだろ。ってかあれは爆発で死んだんじゃないか」

「違うのよ。あれは遠山金一を狙ったと思う。多分遠山金一と『武偵殺し』は直接対決だったと思う」

「までまで、まさか『武偵殺し』がアリアを狙ってるんじゃないだろうな？」

「その可能性はあるわ。もしかしたら他の人を狙ってるかもしれないけど」くそっ、今から羽田までだと20分はかかるだろうな

「教えてくれてありがとう。んじゃ行くわ。」そう言ってから部屋を出た

「情報料5万円ね」とか聞こえたが今は構ってられない。ってか金取るのかよ!?

ってか俺はどうやって羽田までいけばいいんだよすっかり忘れてたなあ……しまったああああ

そう考えている時に、「ゲンせんぱーい、香織さんに言われてきてあげましたよお」そう言いながらこっちにバイクで来て降りた。

「あれ? 君ってたしか車輜科ロジで香織の戦姉妹アミカの……誰だっけ?」
知ってはあるんだけどなー名前何だっけ?

「酷しむらいっ、私の名前は志村こしい 心こころですよお」

「そうだったそうだった。そういえばそんな名前だったね。香織に言われたってことはもしかして羽田まで送ってくれるの?」

「送らないですう。このバイク使って一人でいってください。一応300越せるように改造してますう」

「そうか、ありがとな」そう言ってからバイクにまたがって発進した。

「使用料3万円ですう」

「やっぱりお前も金取るんかい!」俺は一応突っ込んだが聞こえて

いないだろう。

やっぱり戦姉妹同士似てるんだなあ。別にこんなところが似なくていいのに……

「はあ、今月かなりきついな」そう言いながら高速を時速280?で走った。

幼馴染みとその戦姉妹は嫌なところで似ている（後書き）

あれ？まだハイジャックまでいってないぞ？どうなってんだ？

登場したオリキャラの詳細置いときます

名前..志村 心

学科..車輛科 Cランク

容姿..黒髪のストレート目は黒

詳細..香織の戦姉妹で、香織とどこで、であったのか玄武も知らない。弱々しい

貴族っていいなあ

第15弾 貴族っていいなあ

「あっ、しまった。マガジンあんまり持ってきてねえ」気づいたのはあと5分で羽田に着くって時だった。

「これからキンジの兄貴を倒した『武偵殺し』と戦うってのに……もっと準備すればよかった。そういやキンジって『武偵殺し』が兄貴を倒したって知ってんのかな？連絡するか」独り言を呟いた後キンジに電話してみた。3コール目が出た。

「なんだいゲン？今、お姫様を救出しに行ってるから構ってられないんだけど……後ゲンも羽田に来てくれないか？」キンジがヒステリアモードになってやがる

「なんだ。羽田にアリアがチャーター便に乗っていて『武偵殺し』に狙われてるかもしれないって知ってたのか」

「ああ、さっき理子に聞いたんだ。そう言うってことはゲンも羽田に向かってるんだね？後どれぐらいで着くんかい？」その話し方を俺に使うなよ

「後5分ってとこだお前は？」

「ゲンと同じくらいだ。」

「そうかわかった。じゃあまた後でな」そう言ってから電話を切った

5分後羽田に着いてバイクをおいて中に入った

「よおキンジ。ヒステリアモードは切れてるみたいだな」前を走っていたから声をかけた

「ゲン、やっと来たか。お前はどうかやって知ったんだ？」

「香織だ」

「香織って紅崎のことか……そういえば幼馴染みって言ってたな」

「ああ、もう時間がない。スピードあげるぞ」そう言ってから走るスピードをあげた

途中、空港のチェックインを武偵手帳の徽章で通り抜けた。金属探知機？なにそれ知らねえなあ

「武偵だ！離陸を中止しろ！」キンジが機内に入ったとたんと言った。

「お客様！？失礼ですが、どういう」

「残念だけど説明する暇がないんだ。まあ止めてくれ」俺がのんきに言った。

アテンダントはうなずいてから二階へ駆けていった。

「これで助かったな」キンジが言った矢先に機体が揺れた。どうやら動き出したようだ。

「あ、あの……ダメでしたあ。規則で、このフェーズでは管制官からの命令でしか離陸を止めることはできないって、機長が……」アテンダントがガクガク震えながらキンジを見ていた。

「どうするキンジ？銃で機長を脅して止めさせるか？」

「いや、もうだめだ。今止めたら他の機体とぶつかってしまうかもしれない」

「じゃあアリアのどこに行くか？」

「そうするしかないな」そう言ってからキンジがアテンダントを落ち着かせて案内してもらった。

「…キ、キンジ！？それにゲンまで……」アリアがビックリしていた。

「キンジ、やっぱり庶民と貴族って違うもんだな。この部屋片道20万するみたいだぞ」

「断りもなく部屋に押しかけてくるなんて、失礼よっ！」

「アリアも最初部屋に押しかけて来たような気がするんだが」俺が言った

「うるさいっ！なんでついてきたのよ」

「太陽はなんで昇る？月はなぜ輝く？」キンジがアリアの言葉をパクった

「なあ。そんなことどうでもいいけどさ。ここすごいな」そう言ってから絵の裏とか花瓶の中とかを見たりして盗聴機がないか探した。おかしいな、アリア狙ってんだったらあると思ったんだけどな

「ゲン！勝手に散策しないで。そんなとこ見てもなにもない！」怒ってるようだ。

「アリア、トイレどこだ？漏れそうなんだが」アリアがなにか言おうとしてたがトイレを見つけたから入った。

（さて、いつ頃『武偵殺し』は現れるかな？）そう考えながらトイレも一応探しておいた。

俺がトイレからでると「お客様に、お詫び申し上げます。」とか流れてきた

ガガン！ガガン！雷が鳴っている

「キンジ、アリアの相手しといてくれ。ちょっとトカレフの整備やつく」

「ああ、わかった。頑張っといてくれ」

整備が終わりかけると……パン！パン！という音が聞こえた。銃声が聞こえた方にキンジとアリアが行った。そして戻ってきた。

ベルト着用サインと注意音が点滅していた。それを解読したみたいだったキンジたちがまた行った。

「おいおい、一言かけてから行ってくれよ。まあこの銃声からいうとワルサーP99、にしてもやっぱり現れたか」そう言って整備を終えて、解読してわかった一階のバーへ急いで向かった

貴族っていいなあ（後書き）

どうしよう。新オリキャラ考えたけどいつ出すか迷う。もうハイジ
ヤツクの時に出してしまおうか：

犯人はお前だ！って言ってみたい

第16弾 犯人はお前だ！って言ってみたい

俺が一階のバーへ着いた時、なぜか理子とキンジたちが相対していた

「あれ？何この状況…全くついていけないんだけど……なんで理子がここにいるんだ？」キンジに聞いてみた

「見ての通りだ。理子が『武偵殺し』だったんだ。理子が……兄さんを……」

（理子だったのか、これじゃあ、犯人はお前だ！って言えないな。言ってみたかった……）

「だからキンジのお兄さんは理子の彼氏だって」理子が言ってきた

「いいかげんにしろって言っただろ！」そう言ってからキンジがベレッタを強く握っていた。

その瞬間、機体が揺れて、気づいた時にはキンジのベレッタが壊されていて理子の手にはワルサーP99が握られていた。

「ダメだよキンジ。オルメスの相棒は戦う相棒じゃない。バンビー視点からヒントを与えるんだよ」

理子がしゃべってる間にアリアが理子に襲いかかった。俺としては卑怯と思うんだが……

「アリア。二丁拳銃が自分だけだと思ったらダメだよ」そういつてもう一丁出してきた。

アリアは止まらず至近距離から撃ち合った。俺も援護として撃ちまくった。もちろん二丁で

「キンジ！」アリアが言うのと、キンジがバタフライナイフを開いた。

「そこまで無理子！」そう言ってキンジが慎重に近づくと

「双剣双銃……奇遇よね、アリア」理子カドラが言った

「理子とアリアは色んなところが似ている。家系、キュートな姿、それに……二つ名」

「お前もアリアと同じ二つ名……双剣双銃を持ってるのか？」俺が言った

「ピンポーン。ゲンせいかい。そう、あたしも同じ名前を持っているの。『双剣双銃の理子』でもね、アリア」そう言うてから理子の髪がうじゃうじゃ動いてるように見えた

「あれ？理子の髪が動いてるように見えるんだが俺の気のせいかな？」俺が言った

「いや、気のせいじゃない。見た目メデューサじゃねえか」キンジが返答した

動いた髪が背後に隠していたナイフをもちアリアに襲いかかった。

一撃目はなんとか避けたが、反対の髪の手刀が、鮮血を飛び散らせた。そして理子が突飛ばした

「キンジ！アリアを頼む。俺が時間を稼ぐ」そう言って俺はトカレフをしまい、月光、朱雀、陽炎をとった。もちろん二刀一刀だ。ダブルエッジアンドエッジ

「わかった。頼んだぞ」そう言ってからアリアをお姫様抱っこをして行った

「さて、理子、お前の相手はこの俺だ」そう言って複製眼を発動アルファ・ステイグマした。

「来い、複製眼保持者、おまえの実力も見といてやる」

アリアを見習って理子がしゃべってる間に襲いかかった。

「その髪、なんで動くんだ？」

「理子に勝ったら教えてやるよ」そう言って理子の髪の手刀と俺の手刀が交錯する

（なんでイ・ウーのやつらは風で威力増してるのに効かないんだよ。これ普通だったら切り裂いてるのに……ってこれ本当にできてるのか？）

そう考えて距離をとり手刀を上に向けて軽く当てたが切れていない

「複製眼発動してるのになんで使えてないんだよ。理子、おまえが何かしたのか？」

「あたりだよ。アリアの部屋に行く前に飴あげたよね？あれにそういう薬入れといたんだよ。教授に右腕切られたんでしょ。ゲンも逃げたら？」

「あの時の飴か……ってかあん時のアテンダントおまえかよ！」

（ヤバイな……逃げられない……） そう思ったから武偵弾閃光弾^{フラッシュ}のを使ってから部屋に逃げた。

犯人はお前だ！って言ってみたい（後書き）

今回ののは一度書いてまた書き直しちゃったので、変なところがあると思うので、言ってください

新キャラは出さない方向にしました。期待してた人には申し訳ないです

仲間はずれてかなりきつい（前書き）

友達「G?を日本語に直すとjeeさんだよねー」

クロス「wwwwww」

という会話が学校で人とした最後の会話だった。ってか、jeeさんがツボにはまって笑いすぎた

仲間はずれてかなりきつい

第17弾 仲間はずれてかなりきつい

部屋に戻ると……キンジがヒステリアモードになっていた。そしてアリアの顔は真っ赤になっていた

「キンジ……俺が必死に戦ってる間にいったいアリアに何したんだよ」あきれた口調で言った

「別に、なにもやってないよ」キンジはそう言ったが、アリアはもつと顔が真っ赤になった

「まあ別にいいが、閃光弾^{フラッシュ}使って逃げて来たけどもうすぐ理子が来ると思うぞ」

「そうか……^{アルファ・ステイグマ}複写眼はあと何分使える？」

「すまんが。アテンダントに貰った飴食ったせいで発動しても能力が全く使えない」

「じゃあやっぱりこの作戦で行くか。アリアはもう準備しといて」キンジが言うとアリアが天井の荷物置きに入ってしまった

「で、どんな作戦なんだ？」入っていくのを見ながら言った

「ゲンはベッドの中にいてくれたらいいよ。俺とアリアだけで十分だ」ひどっ、仲間はずれかよ

「おまえが言うんだったらそうするよ」そう言ってベッドの布団に全身を入れて待機した

そして少し経つと……

「バッドエンドのお時間ですよー。くふ、くふふっ」理子の声がした。俺は気配を殺して制止した

「あはっ、アリアと何かしたんだ？よくできたねえ、こんな状況下で。くふふっ」

なんだ理子は知ってるのかヒステリアモードになるために何をしなくちゃならないのか

「で？アリアとゲンは？まさかアリアは死んじゃった？」

「さあな」

「あぁん……そういうキンジ、ステキ。ドキドキする」音声だけじゃあ何してんのかわからないな

「さいっこー。愛してる、キンジ。見せて、オルメスのパートナーの力」

理子が言ってから戦闘が始まったらしい。しばらくすると大きく揺れた。その後、銃声が聞こえたと思ったら、ギイイイイイイという音になった。

「動くな！」キンジが言う

「アリアを撃つよ!」と理子が言った後ガタツと音が聞こえた。おそらくアリアが出たのだろう

「峰・理子・リュパン4世……殺人未遂の現行犯で逮捕するわ!」と聞こえたから俺は布団からでた

「結局、俺いなくてよかったじゃないか」キンジに言ったが無視された

「二人とも、誇りに思っていないよ。理子、ここまで追い詰められたのは初めて」俺だけ仲間はずれか……

「追い詰めるも何も、もうチェックメイトよ」

「ぶわぁーか」そう言って髪の毛が動いたと思うと機体が急降下した。

「ばいばいきーん」そう言って逃げた理子をすぐに追った

「待て、理子!さすがに何もしなさすぎて悲しいだろ!」そういいながら走ったが、追いつけない。理子に遅れてバーに着いた。その後キンジもきた

「狭い飛行機の中どこへ行こうっていうんだい、仔リスちゃん」キンジがキモいことを言った

「もう逃げ場ないからさっさと逮捕されろ。そして複写眼をもとに戻せ!」
アルファ・ステイグマ

「キンジ、ゲン。それ以上近づかない方がいいよー。あと、複写眼はもう治ってると思うよー」理子のまわりには爆弾があった。つか使えてたのかよ

「そうそう、プロフェンオン教授からの伝言だよー。『ゲンの複写眼はオリジナルの物だからゲン君の母親のようなレプリカとは違うんだ。詳しく聞きたかったらイ・ウーにきてくれないかな?』だってー」オリジナル?レプリカ?何を言ってやがんだ?

「どういうことだ?」

「イ・ウーに来たらわかるよ。キンジもイ・ウーに来ない?あのね、イ・ウーにはお兄さんもいるよ」

「これ以上怒らせないでくれ。いいか理子、あと一言でも兄さんのことを言われたら、9条を破ってしまいそうだ」

武偵法9条、武偵は如何なる状況においても、その武偵活動中に人を殺害してはならない

「あ、それはまずいなー。キンジには武偵のままでいてもらわなきゃ」

「じゃ、アリアにも伝えといて、わたしたちはいつでも、3人を歓迎するよ?」そう言った後爆発して出ていった

「理子!俺のがオリジナルで母さんのがレプリカってどういうことだ!」大声で叫んだが聞こえなかっただろう

ドドオオオオオオン、何かが飛行機に当たったようだ

「キンジ、今のは何だ？」俺がきいた

「ミサイルが翼に当たった。そんなことより操縦席に急ぐぞ」キンジに言われたから俺たちは操縦席に行った

仲間はずれてかなりきつい（後書き）

次回ハイジャック終了ですが、先に魔剣の方やろうか、オリジナルやろうかとも迷います。オリジナルって言っても1、2話で終わるのにしようかそれとも長いのをしようかとも迷っています。

意見があれば言ってください。

じーさん W W W

面倒なときは帰るのが一番（前書き）

さ、最悪だあああああ

ためおきしてたのが全部妹に消されちゃったあああ

オリジナルの話完結させてたのに……せっかくオリキャラ出したのに……すべてが無駄になった。

面倒なときは帰るのが一番

第18弾 面倒なときは帰るのが一番

操縦席に着くと、アリアが操縦席に座っていた。そしてキンジも操縦席に座った

「なあ、お前ら飛行機操縦したことあるのか？」俺が聞くと、アリアはセスナを操縦したことがあるらしい。まあいいだろう。だが、キンジは操縦したことなんて一度もない。まあ俺がやるよりいいだろうから、スルーした

「何もすることないから墜落しないように祈っとくよ」

「ゲンは無線機で連絡を取っておいてくれ」

「こちら600便〜600便〜」と車掌みたいに言う

「車掌みたいに言うなっ」とキンジが突っ込んできた

「こちら600便さっきはすまなかった。状況を説明するかくかくしかじかだ。」

「そんなんじゃないでしょ！」アリアに怒られた

『なるほど、ハイジャックされて機長と副機長が負傷して、武偵、遠山キンジと、神崎・H・アリアが、操縦しているわけか』と通信相手が言ってきた。

「な、何で伝わってんだよ」キンジが驚いていた。

「着陸の仕方教えてくれないか？」

『言ってもできるわけがないが……かくかくしかじかだ』

「わかるわけないだろう」キンジが言った

「大丈夫だ。俺はわかった。だが、理解できなかった」

「意味ないじゃないか。もういい、武藤に連絡して聞く」というやり取りをしていると

『防衛省だ。羽田への着陸は許可しない』さっきと違う人が言ってきた

「何故だ？」

『今、羽田は封鎖中だ。誘導機に従うんだ』すると、戦闘機が見えた

「嘘ってことがわかりすぎるだろ。何で誘導機に戦闘機を使うんだ？海に出たところを墜落させる気満々じゃないか」

『……………』返事がない。ただの屍のようだ。

「キンジ、ちょっと戦闘機にはご退場してもらおうよ。わかっていると
思うが、指示に従うなよ」そう言って理子の逃げた穴まで行った

「理子が言うにはもう複写眼は治アルファ・ステイグマってるって言ったが、治ってなか

「だったら俺死ぬな」そう言って複写眼を発動して重力操作グラビティを使って、自分にかかる重力をなくして戦闘機に飛んでった。戦闘機に着くと、素早くガラスの部分を割って中にいる人をすぐに気絶させた。そして、海に向きに向けて飛ばした。もうひとつの方も同じようなことをしてやった。

「うーん、戻るの面倒だな。ていうか戻ってもすることないしキンジに任せれば大丈夫だろ。寮に戻ろっ」とそうして俺は部屋に瞬間テレポルト移動を使って戻った

後日談？をしとこうか。まあ、結果はみんな無事だった。キンジはめっちゃくちゃ怪我をして病院にお世話になったが、もう寮に戻ってきている。キンジが部屋戻ってきて始めに俺に言った言葉はというと「何で途中でいなくなっただよ」だった。当然といえば当然だろう。その後、アリアが来たから俺は部屋を出て行って香織の部屋に行き、香織とその戦姉妹アミカの……名前忘れてしまった。まあ金を払った後、部屋に向かっていると途中でキンジに会った。まあ今からするのは、その後からだ。

「キンジ、何でこんなところにいんだ？へり来てるみたいだしもしかしてまた事件とかか？」

「ああ、事件だ。ゲンも関係あるから来い」キンジに言われたから一緒に女子寮の屋上に向かってやった

「アリア！アリア！」キンジが叫んだ。

「ゲンも言え」女子寮の屋上で大声で叫ぶなんて恥ずかしすぎるが「アリアもまん買ってやるから降りてこい」一応大声叫んでやった。すると中からアリアが出てきて飛び降りてきやがった。

「キンジ、役割はお前がキャッチしてキャッチしたお前を撮るでいいか？」まあキンジはそんなこと聞かずにキャッチしにいった

空から女の子が降ってくると思うか？そんなこと俺は思わないし思いたくもない。まあ実際に降ってるからしょうがない。とりあえず写真に納めようかなキンジがキャッチした瞬間に……そして、写真を撮ったあとキンジたちが落ちたであろうビニールハウスに向かった。が途中で

（キンジはもしかしてアリアのこと好きなのかな？そうだったら全力で応援しよう。一応親友だしな）

と、思っ、デジカメで撮った写真を消して、寮に帰った。一応コンビニでもまんを買っておいた

しばらくするとキンジたちが帰ってきた。

「あんた、もまん買ってやるから降りてこいとか言ってたわよね。さっさと出しなさい」やはりアリアが言ってきた。

「ほらよ。よく見てちゃんと食えよ！」もまを思いきりアリアに投げつけた。すると口で受け止めやがった

「あんた、あたしにもまん投げる何ていい度胸してるわね」アリアがそういったあと、携帯を見ていたキンジが、顔を蒼白にしな

が
ら

「あ、アリア、ここから逃げろ！」そんなこと言うキンジの携帯を取り上げて見ると、俺はすぐさま顔を蒼白にさせた

「ぶ、ぶ、『武装巫女』が、う、マズイ」キンジが震えている。だ
がヤツは待ってくれない。

シャキン！！と音をたててドアが切られた。そしてヤツが仁王立ちをしている。

か、顔が怖ええええええええええ

「やっぱりいた。神崎・H・アリア！ きんちゃんを汚した罪、死んで償え！」

そうして、第一次白アリ戦争が始まった。

（俺まで巻き込まれないだろうな）顔を蒼白にさせながら心のそこで呟いた

面倒なときは帰るのが一番（後書き）

前書きにも書きましたが、消されてしまったんで一日一話ってのが崩れてしまうと思います。

この話もこんなだったかな？て感じで書いたものなんで、はじめより面白くなさすぎます。

すみません m (m

Xboxの怨みは大きい(前書き)

Xboxのモンハンフロンティアにはまってしまいました。面白い
ですよ

Xboxの怨みは大きい

第19弾 Xboxの怨みは大きい

「なあキンジ、提案があるんだが、お前に今から言うことをお前が白雪に言うとか戦闘はおさまる」

「なんだよ早く言ってくれ。これ以上被害が及ばないうちに」白雪とアリアはただいま絶賛戦闘中だ

「じゃあ言うぞ『白雪、好きだ』と言うとこれがおさまる」

「言えるわけないだろ」キンジが言ってきた

「じゃあ、台風と同じで治まるまで気長に待とう」キンジの肩にポンッと手を置いて言った

「ゲン、諦めないで考えてくれ。このままじゃあお前のPS3まで破壊されてしまうかもしれないんだぞ」キンジがそういった直後俺のXboxが撃たれた後、斬られてしまった。

「……………キンジ……………協力しろ……………あいつら……………殺す」そう言ってからトカレフを二丁抜いた

「おい、ゲン、落ち着け、9条を破るな」そう言って俺のアリアの頭と白雪の頭を狙っていたトカレフを揺らしやがった

「キンジ、男には殺らねばならないときがある。それは今だ！」そ

う言ってキンジを押し退けて白アリ戦争に俺が入っていった。ちくしょう、俺が必死に頑張ったモンハンのデータをよくも！

「アリアあ！白雪い！覚悟しろよお！絶対お前たちを潰すっ！」
う言って複写眼も発動させた

「なにそんなに怒ってんのよ？でもやるってなら手加減しないわ」
アリアが言って撃ってきた。が、それを俺は中指と人差し指でつかんでほった。それを見たアリアは驚いていた

「まずはひざまつかせてやるっ！」そう言って重力操作グラビティを使ってアリアと白雪にかかる重力を10倍にしてやった。

「か、からだが動かない。ゲン！超能力使うなんて卑怯よ！やめなさい！」そう言ってきたがアリアに向けて撃った。ってか白雪にも撃った。ほんの2分間だけ撃ち続けた

「ゲン君邪魔しないで私はアリアを斬るー」だが撃ち続ける。しかも無言で

「キンジ！何とかしなさい！」痛いだろうによく二人とも喋れるな

「ゲン：そろそろやめといった方がいいぞ……」キンジが言ってくる

「やめるって何を？」

「その銃撃だよ」

「あれ？もしかしてお仕置きの邪魔をするの？だったらキンジにも容赦はしないよ」

「撃たないでくれ。ってか4分たったから複写眼解かないと明日筋肉痛で動けなくなるぞ」

「ちっ、しょうがないか」そう言って複写眼を解除した。アリアと白雪は倒れたままだった

「そーいやキンジ、俺、父さんに家に帰ってこいって言われてんだよ。だから今日から実家戻るわ」

「急だなあ。まあゆっくりしてこい」キンジが言ってくる

「ああ、多分4日ぐらい戻るから、この後処理よろしく」そう言って事前に用意していた荷物をもって逃げるように出ていった

「俺にこの後処理をしろってのか？無理だろ」とかキンジが言ってたが俺は知らない

X b o xの怨みは大きい（後書き）

妹にされたことを思いながら書きました。ストックだと違う展開になって、オリジナルストーリーに入っていました。ちなみにこれは魔剣編です。

感想待っています。

縁談？なにそれ、食べれるの？

第20弾 縁談？なにそれ、食べれるの？

よし、今は電車の中だし一応どんなか言っておくか。俺の実家は北海道の夕張市にある。

家はサザエさんの家の倍ぐらいの大きさと庭は無駄に広い。後は、地下に訓練所があるってだけで、だいたいと同じだ。

家族は、今は、父さん…玄竜と妹二人…舞と葉月だ。まあ、暴走した後死んだ母さん…神奈と、事件に巻き込まれて死んだ弟…日向もいた。

父さんは公安0課の2番隊隊長で、舞は小学6年で葉月は武偵中二年、強襲科だ。
アサルト

あ、あと家はどんな能力（父さんは魔術と言っている）でも使えたり解析できるから、表からは魔術研究所と言われている。あとは、呪われた一族といわれてるぐらいか

む、着いたらしいな。話はこれぐらいにして行くとするよ。

そして、電車から降りて家に向かった。出たのは夕方だったのにもう朝になっている

（にしても、まだ母さんの命日でも日向の命日でもないのにいったい何のようだよ）とか考えてたらあっという間に着いた。無駄に広

い庭を歩いていると

「あ、お兄ちゃんだー」そう言ってから、舞が太刀を扱う練習をやめてから、こっちにきた

「父さんと葉月は？」俺が舞に聞いた

「お父さんなら中にいるよー。葉月ちゃんなら今、依頼で青森に行ってるー。多分明日には帰ってると思うよー。ねえ何で帰ってきたの？まあそんなことより稽古つけてよ」とか言ってくる

「父さんが帰ってこいっていったから帰ってきたんだ。後、俺につけてもらうより父さんにつけてもらえ」

「えー、だってお父さん私に甘いんだもーん」とかいって頬を膨らましている。

実は父さんは日向が死んでしまったこともあり、舞と葉月に溺愛しているのだ。葉月が武偵高に行くのを猛反対したこともあった。まあ俺が説得してやったんだが

「まあ、そうだろうな……しょうがない、用事終わったら見てやるよ」ため息をついてから言ってやった

「やったー。早く用事終わらしてね♪」とか言って抱きついてくる

「わかったから離れる。早く用事終わらないぞ」と言ったらすぐ離れてくれた

「じゃあ父さんに会ってくるからお前は太刀をもう少しましに使えるようにしとけ」そう言って家の中に入っていった。

奥の父さんの部屋に行ったがいなかった。他の部屋も探したけどいいない。これだから大きい家は困るぜ。そして地下の訓練所に行った。正直、訓練所に行くときは階段で、したに降りるときから気を引き締めなくてはならない。なぜなら……

バヒュン、ナイフがさつき俺の頸動脈があったところを通った。そう、階段で降りたり上がるときはナイフが大量に発射される。それも当たると重傷を負うところを……俺は五歳の頃から来てたが、舞や葉月はまだ来たことがない。理由は簡単、死ぬかもしれないから

そして、地獄の階段を下り終わると父さんがいた。

「父さん、用事ってなんだ？お仕置きを中断してきたんだけど」

「やっときたか玄武、待ちくたびれたぞ。2日間もここにいてたじやないか。で、どうだ？彼女はできたか？」本当にこの人は演出にこだわるなあ。

「彼女？そんなのいないよ。彼女いない歴〓年齢のままだよ」自分で言ってるのを悲しく思いながら言った

「香織ちゃんと付き合ってるんじゃないのか？」何で会ってこんな話しなきゃならないんだよ

「香織とはそんな関係じゃない。ただの幼馴染み。そんな用なら舞に稽古つけないんだけど……」

「そうか、彼女はいないのか。よかった。じゃあこの話はOKだな」

「なんの話？全くわからないんだけど」

「ああ、お前に縁談のはなしがあるんだが」……………縁談？なにそれ、食べれるの？

「縁談ってあの縁談？」俺が言ったが、ヤバイ全く頭が回らない。なに言ってるんだ？父さんは

「ああ、多分玄武の思ってる縁談だ。要するに婚約だな」なーんだ婚約かゝゝ

「……嫌だああああああ。まだ未成年だし、婚約何てしたくねええええええ」

「そうか、でも向こうはお前の写真見せたらOKしたらしいぞ。一応会ってみるだけ会えばいいじゃねえか」

「嫌だ。本当に婚約何てして自由を奪われたくない」

「じゃあこうしよう。今から決闘してから父さんが勝ったら会うだけ会おう。玄武が勝ったら会わなくていい。もちろんお互い複写眼アルファ・ステイグマを使ってもいい」人の話を聞けええええ。しかもそれって五分しか使えない俺ってめっちゃ不利じゃん……あれを使うか

「わかったそれでいい。場所は庭。準備してから行くから父さんは先に行つていてくれ」

「ふふ、いいだろう。久々の息子との決闘だ。ちゃんと太刀を使ってきてもらわないとな……」そう言ってる父さんは先に上に上がった。

（俺が使うのは太刀だけじゃねえ、あれを持って行ってやんよ）と
心の中で呟いた

縁談？なにそれ、食べれるの？（後書き）

うーん、本編にはいるのはかかりそうですね。まあ、魔剣編です
一応。玄武の家族の詳細は次からです

音速の戦い（前書き）

オリジナル章のように思えてきてしまった

音速の戦い

第21弾 音速の戦い

俺は自室に戻って、月光、朱雀、陽炎、トカレフ三丁を置いて、置いてある得意武器である太刀、霧幻と妖刀、大蛇^{オロチ}を取って庭に行った。庭に行くとギャラリーが舞が一人と思いきや二人いた。葉月がいつのまにか帰ってきていた。

「ゲン兄おかえり。なんでこんなことになってんの？」葉月が聞いてきた

「かくかくしかじか、だ」適当に言ってやった

「そんなのわかるわけないでしょ」

「武偵ならいかなる状況でも自分で判断しろ」面倒だから誤魔化した

「玄武の婚約をかけて決闘するんだよ」父さんが言ってきた

「え!?! お兄ちゃん婚約しちゃうの?」舞が食いついてきた

「する気なんてない。絶対に」そう言ってから久しぶりに霧幻を抜刀した。大蛇は抜いていない

「じゃあ始めるか。どちらかが参ったと言うまで続けるからな」そう言っ^{アルファ・ステイグマ}て父さんは複写眼を発動させた。

「どっち勝つと思う？」葉月が言った

「お兄ちゃんに勝って欲しいけど…負けちゃうと思う」舞が言った。まあ当然だろう。複写眼使えると言っても俺は五分しか使えないし、だけど向こうは無限に使える。だからこそ、この妖刀、大蛇を持ってきてるんじゃないか

「お兄ちゃんに勝ってほしいってヒドイッお父さんも応援してよ」スキが見えたので絶影で斬りかかった。

キンツツツツって音とバヒュンツツツと音がした。いつの間にか掴まれていたナイフで絶影を受けとめ、こちらにナイフを投げつけた。

「まだ、魔術をひとつも使っていないのに危なかったねえ」ニヤニヤしながら言うてくる

「どうせ父さんは魔術なんて使う気ないだろ。だって俺が複写眼をまだ使っていないんだから」

「まだ使う気なんてないよ。でもゲンも勝つためには使うだろ？」

「うん、使うよ。でもまだだ、まずは太刀でしかない技が通じるかどうかだ！」そして持ち方を居合いの持ち方にした

「技？そんなの教えたことないし見たこともないな」

「油断が命取りだ！まあ命何て取らないけど……」

睦月^{むつき}』」

そう言ってキンジの『桜花』という技を応用した音速をこえる刀で斬りかかった。が、いつの間にか抜かれていた父さんの愛用大剣、紫煙^{シエン}で受けとめられていた。

「うーん、今のはすごかったなあ。まさか音速を超えてくるなんて…でもネーミングセンスがないなあ。次はこっちから行くよ」そう言ったら父さんが俺の技、『睦月』の構えをしてきた

「『睦月』？ だったかなこれ結構使えるからこれからも使わせてもらうよ」と言って音速をこえる剣で斬りにきた。こちらも『睦月』でで応戦したけど明らかに父さんの方が早かった。おそらく舞と葉月は見えていないだろう

「これは使わないとダメだな」そう言って俺も複写眼を発動させた。

「やっと使う気になってくれた。これで父さんも魔術を使えるよ」本当に手加減されてこれってマジでダメだな。もしかしたら父さんの方がイ・ウーにいる教授^{プロフェッショナル}より強いんじゃないか？

ピアノ線投げナイフを適当な位置にほって、風で起動を操りながら父さんと太刀を合わせる。けどすべて落とされる。おそらく重力^{グラビティ}操作^{ビデイ}だろう。父さんの重力操作は生き物には使えなく、ものにしか使えないという欠点がある

「うんうん、なかなかのアイデアだ。ここまで成長して父さんは嬉しいよ」これじゃあダメだな。あれを使うか

「一応この技で決めるよ。これがダメだったら、俺の負けでいい。」

この、能力も使って使う技で……

」そう言って霧幻を片手に持ち、抜刀した大蛇をもう片方で持った。

「大蛇も持って何をするんだ？」楽しそうに笑ってやがる

「天月流奥義十三ノ型、『剣殺神月』けんさしんげつ」これは威力が高すぎるから、人を攻撃する技ではなく敵の武器だけを破壊する技だ。『睦月』が音速なら、剣殺神月は光速をこえる。しかも、複写眼の使える能力で逃げれなくする

そしてそれを受けるであろう大剣はもちろんコーティングされているであろう。だからこそその妖刀、大蛇だ。

この妖刀、大蛇は相手がコーティングしているなら、その能力を自分のものにしてしまうという進化する刀だ。まず、大蛇で父さんの紫煙にコーティングしている能力を喰らわせその後で霧幻でぶっ壊す。ただそれだけの妖刀任せの技だ。

しかし、これには弱点がある。これで壊せなければ自分が斬られるという諸刃の剣だ。そう、今のような状況だ。

「な！？……能力で避けなくしてるのに、なぜ避けれる？」

「もう勝ちでいいのかな？その技は通用しなかったでしょ。それに、その技は複写眼相手には使っちゃダメだよ。全部解析して解除しちゃうからな。というわけで明日会うだけあってもらうぞ」

なるほど、そういうことか。はあ、負けちまったか、さすが公安0課の2番隊隊長だな

「しょうがないか……って明日!？」霧幻と大蛇を鞘に納めながら言った

「なんだ？急だったか？」

「うん、当たり前だろ。早すぎる」

「早い方がいいじゃないか。どうせ会うだけだし」そう言ってから父さんが家の中に入っていった

「まあいいか。舞、葉月、今から稽古するぞく準備しろく」

そうして舞と葉月の稽古をやり終えてから、飯の時間になった。誰が作ったかという俺だ。正直もう疲れた。

食事中に

「ゲン兄いつまで家にいるの？」葉月が言った

「うーん、3・4日ぐらいかな」俺が答えた

「じゃあお兄ちゃんそれまで毎日稽古してね」舞が言ってきた

「そうだな、せめて地下の訓練所に行けるまで鍛えてやるか。そういや、舞って来年武偵中に入るのか？」

「うん！^{アサルト}強襲科に入るつもりー」

「そうか、葉月は今なにランクなんだ？」

「Aランク。ゲン兄のようにSランクになるのが難しい」

「Sランク何て早々なれるもんじゃないからな。しかも、父さんのようなRランクは論外だ」

「別に玄武だってギリギリRランクになれるぐらいの実力あるぞ」

「父さん、俺は今探偵科インクスタだから実力なんて関係ない。しかも武偵高だと、妖刀どころか太刀も使ってないからね。まあ、ハイジャックと、『教授』との戦闘のせいで太刀は持っていくことにしたけど」

「『教授』だと、玄武いつ戦ったんだ？そいつが誰だかわかって戦ったのか？」急に父さんが低い声で言ってきた。

「「ごちそーさまー」」舞と葉月が声をあわせて皿を持っていってから席をはずしてくれた

「イ・ウーの一員としか知らない」

「バカが！『教授』はイ・ウーの？1イ・ウーの中じゃあ一番強いやつだ。無謀な戦いはやめてくれ、お前まで死んだら、舞と葉月はこれ以上悲しむことになる」

「父さん、俺は死ぬ気なんて全くない。ここにきたのは自分を鍛えるためでもある。父さん、どうすれば複写眼を長く使うことができる？」真剣な声で聞いた

「それは明日縁談を終わらせてから教えてやる。今日はもう寝ろ」

「……………ああ、そうする」

そうして1日が終わった

音速の戦い（後書き）

海山 玄竜

所属…公安0課2番隊隊長

武器…大剣、紫煙

詳細…海山家の大黒柱。公安0課の中でも上位の強さ

海山 舞

武器…太刀、絶影

容姿…Angel Beatsの小さい頃のゆりっぺを想像してください。
さい。あれの黒髪です

詳細…玄武の妹。小学六年で、複写眼は遺伝していないから使えない

海山 葉月

所属…北海道武偵中2年 強襲科 Aランク

武器…槍二本、彩月と麒麟

容姿…髪型はショートヘアーの黒髪。なかなかの美少女。

詳細…玄武の妹。舞と同じで複写眼は遺伝していないから使えない。
噂によると

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976z/>

緋弾のARIA～呪われた眼を持つ者～

2011年12月26日21時55分発行